

更級への旅

113

ありますが、基本は哀歌だと思えます。そしてその哀歌を代表する「影を慕いて」を20代前半の若者が作ったことが時代の空気や精神を象徴しています。石原慎太郎さんが「太陽の季節」を発表したのも23歳で大学生でした。

「夜明け前」の連載を雑誌で始めたのも昭和4年です。藤村のこの大作と古賀さんの「影を慕いて」が同時期に世の中に送り出されたのは、同じ時代背景があると思います。古賀さんの「影を慕いて」は、太陽の強い日差しの中で傷ついた日本人のからだを心の光で癒そうとした気がします。

「昭和歌謡」を代表する作曲家、古賀政男さん（故人）の作った曲の数々を総称して「古賀メロデー」と呼びます。「古賀メロデー」は月の音色、月のメロデーと言っていると思います。明治維新後の「太陽の季節」で傷ついた日本人の心とからだを癒すメロデーとして大衆に受け入れられていったのではないかと思います。

▽将来への絶望

美空ひばりさんが歌った「柔」「悲しい酒」をはじめ、古賀さんが作ったたくさんある曲の先駆けが「影を慕いて」という題名の歌であることが象徴的です。「まぼろしの影を慕いて／雨に日に…」で知られる歌です。詞はさらに「月にやるせぬわが想い」と続き、この曲のタイトルにある「影」は明らかに、月の光のできる影をイメージしたものです。

古賀さんは明治37年（一九〇四）生まれ。この曲を作ったのが昭和3年（一九二八）で、明治大学の学生のときでした。古賀さんの自伝「歌はわが友わが心」の中で、この歌ができたいきさつについて記しています。

初めは、政府の不適切な金融政策で不況になって失業者があふれ、中国では日本の関東軍による張作霖爆殺事件が起き、争、動乱への心配が濃く、暗い世相が日本に蔓延していました。弦楽器が好きだった古賀さんは明治大学に入ると、マンドリン倶楽部を創設し音楽を楽しんでいたのですが、卒業を間近に控えた昭和3年の夏、音楽では食べていくことも恋も成就できない時代だと将来に絶望し、宮城県川崎町の青根温泉で自殺を図りました。

▽石原さんと同年齢で

のどにカミソリの刃を当てました。しかし、死にきれず、そのときの思いをすべて注ぎ込んで作った詞が「影を慕いて」。当時住んでいた下宿で雨がしとしとふる夜、たばこの煙管を修理清掃する「ラオ屋」と呼ばれた小さなリヤカーが「ビュー」と笛を鳴らしながら通っていくのがやるせなく聞こえ、それをギター

の音に変えたところ、メロデーができたそうです。翌年の昭和4年、明大マンドリン倶楽部の定期演奏会でギター合奏曲として発表しました。演奏会にゲストで出演



▽「夜明け前」と同時期

「影を慕いて」が大流行したのは、古賀さんが自ら命を断とうとするまでに追い詰められた、暗い世相が背景にあるのは間違いありませんが、暗い世相は明治維新後、欧米列強諸国に追いつけて追い越せと日本が文化、軍事面ともに「太陽の季節」で突っ走ってきた結果の、社会現象でもあったのではないかと思います。

シリーズ111で取り上げた島崎藤村

原点は昭和初期の「影を慕いて」

古賀政男 ギター魅力のすべて 永遠の古賀メロデー①



古賀メロデーには「丘を越えて」「東京ラブソディ」など快活な歌も

古賀さんが自ら命を断とうとするまでに追い詰められた、暗い世相が背景にあるのは間違いありませんが、暗い世相は明治維新後、欧米列強諸国に追いつけて追い越せと日本が文化、軍事面ともに「太陽の季節」で突っ走ってきた結果の、社会現象でもあったのではないかと思います。

シリーズ111で取り上げた島崎藤村

▽風月会の棚田バンド

古賀メロデーに関心を持ったのは、千曲市羽尾地区（旧更級村）在住のギター製作者、上水清さんとおつきあいからです。上水さんは二〇〇五年の全国アマチュアギター製作コンテストで優勝し、現在はプロとして製作を続けています。上水さんは一九四五年生まれで、青年期を古賀メロデーとともに過ごしました。作るギターの多くはクラシックギターです。いわゆるフォークギター

の音色とは違い、古賀メロデーを奏でるのに向いているそうです。

上水さんは旧更級村地区の住民グループ「更級人『風月の会』」の結成に当たった発起人の一人で、コンサートや講演会など会の催しの企画・事務局を担っています（シリーズ61参照）。古賀メロデーを本格的に取り上げるコンサートはまだやっていません。いずれやってもらいたいと思います。

右の写真は、更級人「風月の会」のメンバーで結成した音楽仲間「棚田バンド」の演奏風景。中央でハーモニカを吹いているのが上水さんです。

発行 二〇一〇年 四月五日

編集 さらしな堂

（代表・大谷善邦）



〒三八九・〇八一三

長野県千曲市大字若宮一八四・六
（旧更級郡更級村）